

「翻訳に見る産業社会の構造変革」

株式会社バベル 代表取締役社長 湯浅美代子氏

1985年頃から輸出が多品種少量に変わり、加えて海外生産の加速に伴って翻訳需要が急速に高まった。しかし、翻訳者は不足し、コンピュータを使った自動翻訳に移行する動きが高まった。我々は、人手による翻訳業の成立に大いなる危機感を抱き、機械翻訳の研究も並行して行なった。

翻訳とはCommunicationであり、主体はあくまでも人間である。機械翻訳も最終的に翻訳者の責任であり、我々のビジネスも十分成立する。そこで、企業コンセプトを、単なる翻訳者の養成からCommunicationへの協力へと転換し、“農業経営方式”を取り入れた。畑を耕し、種を蒔き、育て、収穫し、種を採り、再び蒔くというサイクルだ。これを経営に当て嵌め、社会に対して情報を提供し、啓蒙する。その手段として、雑誌「翻訳の世界」を出版し、インターネットの発達を利用して翻訳を在宅勤務化し、裾野を広げるために通学制教育も開始した。また、翻訳ネットワークとしてバベル・インターナショナル社を作って卒業生の受け皿とした。サイクル経営を多角化したのである。

近年、翻訳ビジネスは、米国横這い、アジア急増、コンピュータ関連は27%から43%へ、通信関係は13%から24%へと大きく変化した。文書の種類も、科学技術関連28%→35%、特許10%→12%、映像マルチメディア関連3%→9%と増加した反面、単なるビジネス文書は36%から28%へと減少した。機械翻訳業者は、設備投資の大きさと品質レベルの不安定さによって閉鎖や倒産に直面した。

独自路線を走るために、新9か年計画をたてた。この大競争時代を生き抜くために、他に真似のできないOnly One企業になる。そのために社員の意識改革を行なった。

〇〇をするのは大変だという考えを捨てさせ、〇〇をするのは簡単だと考える習慣を社員の中に浸透させた。物事自体は人間の意識が作るからだ。ビジョンの明確化により、道が開け、具体的行動に移れて成果が上がる。

そこで「Trans X, Cyber One.」というスローガンを掲げた。トランスすることによって一つにしていくという意味だ。外部から刺激を受けると1つの事業が振るえ、その震えが音叉のように背後にある全ての事業を共振させるということだ。

サイバー・ワン事業の中にBabel Univercityを置いた。sityでなくcityとしたのは産学協同のコンセプトを表わしているものであり、今後の展開の一つのカギを握っているものだ。